

鴨東通信

秋

2017.9 No.105



●日常語のなかの歴史18
かよ【火曜】

中島和歌子

●てーたいむ
どうせ期待されていないのだから。

井上章一

●エッセイ
明治天皇のダイニングホール

今泉宜子

赤坂仮皇居と「食」の宮中外交
カラーとモノクローム

竹内幸絵

—— 広告史の狭間で
香を聞きながら

濱崎加奈子

ビター文の歴史学

高木久史

●リレー連載 世界のなかの日本研究26
トルコの宮殿を彩る明治日本美術工芸品

ジラルデッリ青木美由紀

●史料探訪66

戦後大阪マンガ界の痕跡

雑賀忠宏

—— 小寺鳩甫・酒井七馬・手塚治虫

学問を しばるもの

【近刊】 A5判・約三五〇頁 本体二、五〇〇円

目次

第一部 ◆大日本帝国の時代から

- 論文 はたして言語学者はふがいないのか
論文 日本語系統論の一断面
論文 帝国大学の創設と日本型社会科学の形成
論文 天心の「子ども」たち
論文 「日本美術史」の思想はどう継承されたのか
論文 「日本美術史」の形成と古都奈良・京都
論文 邪馬台国論争の起克
論文 白鳥・津田史学からの脱却
論文 特高警察と民衆宗教の物語
論文 日本人起源研究をしばってきたものごと

長田俊樹
瀧井一博
藤原貞朗
高木博志
小路田泰直

第二部 ◆戦後の光景

- 論文 エポックメイキングな歴史書
論文 大塚久雄・越智武臣・川北稔の歴史学
論文 〈国文学史〉の振幅と二つの戦後
論文 西洋・「世界文学」・風巻景次郎をめぐる
論文 民科とスターリン言語学
論文 中世史学史の点と線―石母田史学の挑戦
論文 戦後日本古代史学への雑考
論文 学問への内外の規制―日本史学の場合

玉木俊明
荒木 浩
安田敏朗
関 幸彦
若井敏明
今谷 明

時局による言論の制約、マルクス主義の流行、はたまた所属学会への配慮や、恩師・先輩への気遣いなど煩わしい人間関係……。資料と向き合い、ひたすら真理を追究していると思われる人文系の研究者たちも、知らず知らず社会のさまざまなものに拘束されている。そんな学者たちの息苦しさの歴史を、科学史的に明らかにしようと企画された国際日本文化研究センターの共同研究「人文諸学の科学史的研究」の成果。

あなたもしばられていませんか？

幕間

- コラム 共同研究の支え―樋口謹一の仕事
コラム 「教育勅語」と「十戒」雑感
コラム 角屋と桂離宮
コラム 真理と自由、そして学会

鶴見太郎
上村敏文
井上章一
井上章一

第三部 ◆戦後は明治をどうとらえたか

- 論文 学問を、国という枠からとるときはなつ
論文 「アメリカのフランス革命、ソビエトの明治維新、そして桑原武夫がたどった途
対談 明治絶対王政説とは何だったのか

井上章一
竹村民郎×井上章一
北一輝、大川周明、安岡正篤、永田鉄山の関係に
留意して 竹村民郎

第四部 ◆再録

- 論文 『つくられた桂離宮伸話』より
論文 歴史はどこまで学統・学閥に左右されるのか
人名索引

井上章一
井上章一

かよう【火曜】

現代では、「火曜の夜はテレビで『開運!○○』をみるのが楽しみだ」などのように、「火曜」はもっぱら火曜日を指す。

だが本来、「火曜」は「火星」、別名「熒惑星」という星で、

「七曜」の一つである。「七曜」は「日・月・

五星」(『宿曜経』上)、羅睺星と計都星を

加えれば「九曜」となる。数え年ごとに決

まる「当年属星(行年曜・当年星)」は、

6 15 24 33 42 51 60 69 78 87 96 105歳が火曜だっ

た。平安中期は生年の十二支ごとの北斗七

星「生年属星(本命星)」が重視されたが、

院政期には当年星も重みが増す。たとえは

日曜(5 14 : 歳)なら大吉だが、日蝕を慎

む(『簾中抄』下)。木曜(9 18 : 歳)も吉。

火曜は凶。その星神としての姿は、四臂で

武器を持つ(『梵天火羅九曜』)。大江匡房によると、藏人致忠

(藤原元方男、保輔・保昌らの父。何かと物騒な家の人)は、

村上天皇と天文博士賀茂保憲の取次役で知った「天文の事」

を軽々しく厠で人に語り、「熒惑星」に射られたが、当年星

である「木星」の守護で「矢」が「柱」に当たって助かった

日常語の歴史

18

◎日常語のなかで、歴史的語源
やエピソードを取り上げ、研究者
が専門的視野から紹介します。

(『江談抄』三・三六)。

ところで、平安時代にも「火曜日」はあった。各曜に支配される西方起源の「七曜直日(七曜日)」は、二十八宿と共に、空海将来の『宿曜経』により九世紀末から十世紀にかけて暦に注記されるようになる。藤原道長の『御堂関白記』自筆本

は当時の暦の現物でもあるので、暦注や蝕の予報、家司が書き加えた年中行事や道長の物忌など、日記以外の部分も価値が高い。

七曜も、各日の欄外に朱書されている。三条天皇新造内裏遷幸予定の寛弘八年八月十一日壬子は「火曜日」だったが、陰陽師が火災祭を行えば忌まなくてもよいことになった(『御堂』七月一日条など)。曜日が取り沙汰された稀な例である。

一方、毎日の干支は、生活に不可欠だった。たとえば守庚申・二月上丁が孔子を祭る釈奠、四月中酉が賀茂祭。日の吉凶も十二支や干支による。物忌は十干の二日連続。しかし現代は、「土用の丑の日」、鶯神社の「酉の市」、岩田帯を「戌の日」に着けるぐらいか。干支と火曜などの曜日の生活密着度が、平安時代と現代では逆転してしまったようだ。(中島和歌子・北海道教育大学札幌校)

——国際日本文化研究センターでの共同研究
「人文諸学の科学的的研究」の成果として『学
問をしばるもの』が刊行されます。

●目の付けどころ

——本書のテーマは、学者によって生み出され
る研究成果、あるいは学説は、いつも学問的と
は言いがたいものごとに拘束されている、その
ことに自覚的であるべきだ、ということだと思
います。井上先生のこれまでのご著書を見てい
ると、この視点は一貫してお持ちだったのでは
ないでしょうか。まず、この研究の目の付けど
ころからおうかがいたします。

私は工学部の建築学科に学びました。学んで
分かりましたよ。世にあらわれる建築は、みな
様式にしばられます。わたしは近代建築の勉強
をしましたから、建物を見ると、これは一九二
〇年代だなとか、これは二五、六年以降だなと
か、ほぼ外しません。

京都會館はどうみても京都會館の時代の様式
にしばられている。北山のコンサートホールも
あの時代の建築ですね。

現代建築って、自由に造形を羽ばたかせてい

ていたいむ

どうせ期待されていないのだから。

井上章一

(国際日本文化研究センター教授)

そうじゃないですか？ でも、じつは否応なし
に時代の様式にはまってしまうています。そう
いうことには若い頃から自覚的でした。

で、私はたまたま文転をしました。文転して、
京大人文研の日本部というところに入りまし
た。自分なりに開放感を求めての転身だったん
ですが、行ってみると、結構不自由なところが
あるんだなと感じました。それは、きっちり勉
強しなければならぬという不自由さもあるん
だけれども、別の不自由さも感じました。

たとえば、名前は出しませんが、ある先生が
言っておられました。本当はこう思っているん
だけれども、今の学会情勢だとそう論文には書
けないので、こういう落としどころを考えてい
る、と。そういう研究者たちの会話を聞いて、
何をそんなに心配しているんだろうと思ったも
のです。それこそ歴史解釈だったり、作品の批
評だったりで、身の安全なんか心配する必要な
いじゃないですか。南京大虐殺問題とかになれ
ばいろいろあるのかもしれないけど、南北朝の
争いで、今、国家からとがめられることもない
でしょう。でも、学会への配慮があるんですね。
何か不自由そうでした。

私は、日本近代を語るやりとりに加わることが多かったんです。当時ね、日本は十分に近代化していない、イギリスのような典型的な近代化のあとを辿らなかつたという議論が、盛んでした。でも、若い頃に建築を勉強をした私は、思うわけです。イギリスでは、いまだに何とか伯爵が自分の城に住んでいる。でも毛利も島津も城を、とくに手放した。日本の方がよほど近代化しているんじゃないかと。こういう議論をぶつけると、私の周りにいた先生方は笑いながら握りつぶさるんです。どうやら、日本の方がずっと近代的だという議論はまずいんだと感じました。こういう束縛っていったい何なんだろう、というのがことの始まりだったと思います。

それから、これは本のなかでも書いたことですが、日文研におられた埴原和郎先生の研究会で感じたことがあります。日本人の起源論をあつかう研究会でした。あるテーマに対して、考古学の人と、文献史学の人の間で、意見が違うんです。「考古学ではこう解釈します」「いや、文献史学では到底受け入れられません」。「民俗学ではこうなります」というやりとりを聞いたときに、真理とされることは所属学会によって違うんだと、はっきり認識しました。間違ひなく所属学会は参加者に拘束を及ぼしている、と。たとえば、文献史学のなかにいる若い研究者が、考古学の方が正しいんじゃないかなと思ったとしましょう。でも文献史学で、世渡りをしていこうときめた人は、そう言い出せないのです。非常に暗い世界だなと思います。本書は、こういう膿を出して、もっ

と明るく楽しい世界にしようよという、まあ私の志をこめた成果です。

——先生は「まえがき」で、人文系の学問は科学史から大して相手にされてこなかつたと書かれています。それは具体的にどういう意味ですか？

科学的な真理だとされていることが、じつは同時代の社会情勢に左右されていたり、国家や資本に動かされていたりしますよね。そこを明らかにするのは大事だと科学史の研究者たちは思っている。一方で、歴史解釈がゆがんでいることなんて当たり前だと思っているんじゃないでしょうか。物理や化学ならともかく、そんなの明らかにして何が面白いのか。そもそも歴史学はそれ以外の学問じゃないかと、見くびられているように思います。

——ただど見くびられてもらっていたおかげで、そういう側面があまり明かるみにでなかつたのです。人文系の分野でも、研究者たちが集まって、飲み会でくだを巻いている発言とかを耳にすれば、学会渡世にいろいろ不自由があることは分かりますよ。ただどこに科学史のメスは及んでこなかつた。

——今回そこにメスを入れようと思ったきっかけは？

建築史のテーマですが、法隆寺の柱の膨らみをどういう風に位置づけるかということに関する明治以降の学説史の歩みがあります。それから、九州の百合若大臣伝説の発生をどういう風に解釈するかという文学史の学説史もあります。この互いに関係なさそうな別個の二学説が、ほぼ同じ推移で動いているんです。法隆寺



の柱に関する学説が変わり出す頃に、百合若大臣の読み解きも同じ方向へ変わっていく。

建築の歴史を扱う研究者は建築史の歩みしか見ていません。でも、自分の分野の研究

が、他の分野の何かと連動していることを知れば、自分たちが何にとらわれているのかを、もう少し広い土俵のなかで見いだせるのではないかと思ったわけです。じゃあ、いろんな分野の人が、自分は何にとらわれているという告白合戦をすれば、大きいままりのなかで、人文学の流れが読み取れるんじゃないかと思いました。

残念ながらその全体像をこの研究会が明らかにしたと言い切る自信はありません。でも、この本を読んでくださった人が、そういえばうちの分野にもこんな研究史の歩みがあるんやと、そう気づいてくださることがいっぱいあると思います。

●マルクス主義史学にしばられていた？

——議論の中身についておうかがいしていきたいと思います。思想を縛るものといって私が一番にイメージするのは、マルクス主義史学です。私はそれが流行った時代よりもあとに大学に入った世代なのですが、なぜそんなに輝いて見えたのでしょうか？

そうやねえ、まあ第一は、革命への展望があったということじゃないでしょうか。それこそ世のなかのいろんな束縛をなくして、人民がそれぞれの自由を謳歌できる時代をもたらす、その思想的なより所と思ったんじゃないかな？ 革命はあり得ると、とくに歴史の研究者は思っていたように思いますね。

まあその影響が及んだのはたぶん大学くらいに限られると思いますけれどね。でも竹村民郎さんの話を聞くと、敗戦直後には、国鉄の操車場でも明日は革命だ、という盛り上がりがあったというのですが。天安門事件の直前を生きた中国の知識人とかも、やっぱり夢を抱いただろうし、チャウシェスクを追放する直前のルーマニアの人たちだって……。

あと、世のなかを読み解くときに、階級闘争史観というのがすごく分かりやすく見えたんじゃないでしょうか？ 細かい史料のなかにのめり込むのではなしに、すっきり白黒を付けることができる。どんな史料が出てきても、とにかく地主は悪い、天皇制はひどい、というのが分かりやすかったんじゃないかな。

竹村さんとの対談で、明治時代を絶対王政の時代だと日本のマルキストは考えた、という話題になりました。ところが、ソビエトのマルキストは、明治時代を絶対王政の時代とはとらえていないんです。

明治時代を絶対王政の時代とする見方が流行ったのは、マルキストのせいだと、よく言われます。私も言われて、一応は納得しました。納得はしましたが、じゃあどうしてソビエトのマルキス

トはそうみなさなかったのか、と問うと、たいてい絶句されるんです。考えたことがないと。竹村さんも、そうでした。どうでしょう、明治維新で絶対王政ができたことにしてしまったのは、本当にマルキストなのか？ もしマルキシズムのせいなら、ソビエト史学でもそうしているはずじゃないですか？

ソビエトの日本史では、奈良時代も平安時代も中世ですよ。蘇我氏とか物部氏とかは封建領主です。日本の飛鳥時代・奈良時代を日本のマルキストは奴隸制の古代だと考えたんです。だけど、ソビエトのマルキストは日本の飛鳥時代や奈良時代に奴隸なんかおらんと、あんなもんは古代じゃないと、そう考えたんです。それに、彼らは中国の古代を三世紀の漢までとしますからね。一二世紀ぐらいいまでを古代とする日本の日本史には、なじめないでしょう。マルキストにも、いろいろいるんですね。

ソビエトの日本史と、日本の日本史の間には深い溝があるんです。明治を絶対王政にしたマルキストと、しなかったマルキストの間には。日本の歴史家はマルキシズムにとらわれていたところもあるけれども、日本という枠にとらわれていたところもあったのだと思います。

●日本というパラダイム

私は若い頃に、『霊枢車の誕生』という本を書きました。これは一九七〇年代のある発見がより所になっているんです。建築学科に来ていたスイス人の留学生がね、宮型霊枢車を見て、あれは

何やといいだしたんです。自分は色んな国を廻ってきたけど、あんなものは見たことがない。誰が乗る車だ、と。私の目にはなじんだ車だけれども、はじめて目にする欧米人はおどろくんだなと思いました。つまり日本で暮らしているだけだとピンとこないまあ、あたりまえのことが、海外の人にいわれることで、面白いテーマになりうることもあるわけですね。

私の仕事のなかに『パンツが見える。』という本もあります。きっかけは八〇年代の上海でした。当時の上海は、今みたいに発達していなくて、通勤・通学は自転車だったんです。多くの人が自転車に乗っていました。女の人もたいてい自転車でした。で、長いスカートがチェーンに絡まると危ないから、それを避けるためにスカートの端をハンドルに乗つけて、その上からハンドルを握んで自転車をこいだはる人が、けっこういたわけです。横断歩道の信号が緑色になると向こうからパンツの群れが渡り鳥のようにやってくるんです。私は衝撃を受けました。

で、何人もの中国人に尋ねたんです、あれは恥ずかしいのかと。するとひとりの中国人が「パンツをはいているから大丈夫だ」といったんです。おどろきました。でも、虚心坦懐に考えればそのとおりですよ。なのに現代日本人の私はなぜ、たかがパンツ如きにうろたえるんだらう、こんなひ弱な人間に自分をしたのは何なんだらう、それが研究テーマになると思ったわけです。この課題を教えてくれたのは中国人なのです。

外の目をいかせば、内側だけで煮詰まっていた研究状況を打開

しうる、シャッフルの効果がある。ソビエトの日本史研究には未熟なところがあつたと思います。でも、日本側も、たとえばソビエトではこんな風に言っているという現実とむきあうべきだった。それを最終的には退けるにせよ、受け止めて、うろたえることが大事だと思います。日本史に関するかぎりあいつらは素人だとはねつけてしまつては、煮詰まつた状況が変わらないと思うのです。

日本の美術史家は、本阿弥光悦を研究していますという外国人研究者が来たら、たいてい珍しがるんですよ。いっぽう、イタリアルネッサンスの研究つて研究者の約半数がアメリカ人、残り三割がドイツ人で、イタリヤ人は一割くらい。ルネッサンス研究は世界のテーマなんですよ。フランス革命研究も世界のテーマです。たぶんシェークスピアも、ベートーベンも。そのかわりに、イタリヤ人はミケランジェロの解釈をイタリヤの都合だけでは動かせないんです。アメリカにはこういう方向の研究がある、ドイツにはこんな仕事もあると、それもちゃんと検討せなあかんのやね。そつぽはむけられないんです。それはやむを得ない、世界に開かれているんだから。

だけど安土桃山時代の研究者つて九割九分が日本人じゃないですか。だから仮にイタリヤから、初期狩野派の研究者が来ても、日本の研究者はこういう風にしなさいと彼らを指導してしまうんですよ。なにしろ、圧倒的な本場ですからね。へえ、イタリヤ人はそんな見方をするのか、面白い見方があるなと受け取らないん

ですよ。つまり我々の日本文化史は、テーマが世界のなかでは辺境にあるから、自民族の都合だけで、研究動向を動かせるんですよ。で、私は日文研がせっかくあるんだから、海外の視角を国内へ持ち込んで日本の学会にちよつとくらいはうるたえてもらえる場にできひんもんやろうかという夢を、持っているわけです。まあとにかく、一瞬でもいいから動揺の機会を持ってもらいたい。へえとか、ほおとか思うだけで良いから。

●期待されていないのだから

——いま、人文系の学問がおかれている状況についてはどのように考えておられますか？

今回の本では取り上げなかつただけけれども、私なりに考えていることがあります。二〇世紀の半ば過ぎなら、何か中国で大きな事件があつたりすると、新聞社や財界の人は、ひよつとしたら政治家も、吉川幸次郎のところへ話を聞きに行くことがありました。「吉川さん、林彪事件つて一体どういふことなんでしょうか」とか。僕は李白や杜甫の研究をしていらつしやる吉川先生にそんなこと聞いてもしようがないと思いますよ。でも何か事件が起こつたときに、この際吉川先生の警咳(けいがい)に接したいとか、こういうときに吉川先生はどんな反応をするんだらうということに興味を持つ、まあ何ていうの、政治家も含めて教養人たちがいたんですね。いわゆる吉川詣(きしかい)でがまかりとおつた時代でした。

今は、中国の政治状況をちゃんと見極めたいからといって、中

国文学研究者のところへ話を聞きに行く新聞記者は一人もいないですよ。三菱総研あたりのアナリストへ話を聞きに行くでしょう。このことを、人文学がそれだけ世のなかから見捨てられ出しているせいだと考えることは可能だけれども、別の考え方もあると思うんです。以前の社会は人文学を買いかぶつてた。吉川さんのところへ話を聞きに行つて何になるんやと、思わなかつた。碩学と接すれば役に立つことがあるかもしれないという幻想をいだいていたわけじゃないですか。そういう期待が、今はもう抱かなくなっている。つまり、人文学はあるべき姿になつていゝんじゃないかという気がしなくもありません。

——あまり大きな期待をしすぎていたのかもしれないですね。

以前のような期待を人々は人文学に抱かなくなつていゝと思うけれども、それをまんざら悪いことやとは思わない。現代政治を解きほぐす鍵が人文学に用意できるとは思えませんが、私は自分が文転をしたときの気持ちをふりかえつて思うんだけど、人文系の学問にはやはり面白いところがあります。私はおもしろがりなのです。何ていうの、娯楽として大事やと思う。やつぱり読んでへえとか、ほおとか思うことが、いっぱいあるじゃないですか。それが原点。別に習近平の動静を、古典の研究者が読み解かなくて良いんです。そういうことについてはシンクタンクのウォッチャーがいらっしゃるのやから。

面白さの可能性は、人文学のなかにいっぱいあるのです。それなのに、せっかく面白いことを見つけても、だめだ、これを発表

すればもう自分はこの学会にいらなくなるとか、何々学会の誰々先生ににらまれるとかね、そういうみみっちいことを心配するから、本当ならみんな面白がれるはずのところがかくされてしまふ。せっかく社会から期待されなくなっているのなら、面白がろうよと思うのです。

——いまこそしばらくから解き放たれて面白い人文学になるチャンスなのです。

自粛、自主規制、世渡りの都合というのをちよつと外せば、面白い世界はいっぱいあると思います。だけどね、ある映画研究をしている大学院生が学会報告をするとき、その準備に付き合つたことがあるんですね。こういう発表をしたいという話を事前に聞きました。私は、ここが面白いから膨らましたらいいよとアドバイスをしたのです。それで、私のアドバイス通りに発表したら、興味本位やという批判をいっぱい受けたそうです。

だけどね、僕のなかのロマンチズムなんやけど、小学校の時の夏休みの課題で面白と思うことが一番大事やないですか。それなくして一体何の調査やねんと思います。だけどやつぱり学会に所属しているとね、興味本位というのはさげすみの対象になるので、みんな自粛してしまふのです。私はみなさんにも、自分の興味を大事にして、しょうもないしりからは解き放たれてほしいなと思います。でもたぶん解き放たれないね。解き放たれないからこういう共同研究が続けられる。

(二〇一七年八月二日 於…京都市内)

明治天皇のダイニングホール——赤坂仮皇居と「食」の宮中外交

いま いずみ よしこ
今泉 宜子

フォアグラのパテ香草添え ストラスプール風／牛ヒレ肉のベック風／羊のコートレット豆添え ヴィルロワ風／仔牛の白ワイン煮 ボルドー風／トリユフ入り七面鳥のロースト……。

残念ながら、我が家の食卓の話ではない。今から百三十年前、明治天皇と皇后がドイツ国ヘッセンの公族ヴィルヘルムと囲んだ宮中午餐会の献立だ。明治二〇年五月一三日、場所は赤坂仮皇居御会食所。

明治天皇と皇后の昭憲皇太后は、旧江戸城西の丸の御殿を皇居宮殿としていたが、明治六年に失火で焼失したため、赤坂にあった旧紀州徳川家の江戸屋敷に移転した。以後、二二年一月に明治宮殿が完成するまでこの地を居所とし、赤坂「仮」皇居とした。

「御会食所」とは、仮皇居に不足した天皇の応接用ダイニングホールとして、明治一四年に造られた施設のことだ。条約改正問題が最大の政治課題であった時代に、三大節の賜宴や外賓を招いた晩餐会が行われた宮中外交の重要な舞台だったが、これまでその歴史意義が顧みられることはほとんどなかった。

今般、筆者は専門を異にする二人の研究者とともに、赤坂仮皇

居御会食所とその時代を論じた共著『天皇のダイニングホール——知られざる明治天皇の宮廷外交——』を刊行する機会を得た。本書ではまず、東京工業大学准教授の山崎鯛介が建築史の観点から、その設計意図や儀礼空間の編成過程を論じた。また、近代美術史を専門とし、現在ダブリンのチェスター・ビーティー・ライブラリーで学芸員を務めるメアリー・レッドファーンは、御会食所時代に発展をとげた宮中洋食器について、そのデザイン成立の経過を明らかにする。一方、筆者は饗宴を舞台裏で支えた人物に焦点をあてた。とくに大膳寮の人々、いわゆる天皇の料理番の存在は大きな関心事となった。

「天皇の料理番」といえば、ドラマのモデルともなった秋山徳蔵が名高い。秋山が大膳入りしたのは大正期だが、勉強熱心な彼は献立作りの参考に古今東西のメニューカードを蒐集した。その数、二五二七枚。現在、味の素食の文化センターが所蔵するこの貴重資料を確認したところ、一六枚が御会食所での宮中献立と判明した。冒頭に紹介した献立もその一例だ。

この日、食卓を囲んだのはどのような顔ぶれであったか。答え

は、宮内庁宮内公文書館が所蔵する『外賓参内録』に綴られた席次表が教えてくれる。これによれば、男性は明治天皇を含め一八名、女性皇后ほか九名で、計二八名の会食だった。なかに宮内大臣伊藤博文夫妻、陸軍大臣大山巖夫妻、外務次官青木周蔵夫妻らの名前が見える。妻の名を伊藤梅子、大山捨松、そしてプロイセン貴族の娘・青木エリザベートという。女たちの食卓外交というテーマは、今後さらに掘り下げたい興味関心の源泉だ。

この席次表には、ドイツから招聘したお雇外国人フォン・モールの名前も確認できる。実は、このヴィルヘルム親王との午餐会は、モールが顧問として関わった最初の外賓接待だった。宮内大臣伊藤の秘書官長崎省吾は、そのモールの補佐役として二人三脚で宮中改革に取り組んだ人物だが、国立国会図書館憲政資料室が所蔵する『長崎省吾関係文書』には、モールが作成したこの日のメニューカードの草案が残されている。

彼は、その日本滞在記でこの宴会が「おそろしく長く」、また皿やナイフをガタガタと床に落とす給仕係の仕事ぶりに苦言を呈した。そして、宮中宴会の問題点を長崎とともに文書にまとめ、伊藤を通じて天皇にお目にかけたと記しているが、果たして、その「宮内省顧問モール氏ヨリ聞取書」がやはり『関係文書』に収められていた。曰く、食器ヲ床ニ落サザル様篤ク心ヲ用フベシ。独逸国ノ皇室ニ於テハ配膳人ノ不注意ニテ若シ此ヲ床ニ落ストキハ、其料トシテ一マルクヲ皇宮事務局ニ収メシムルヲ以テ例トス、云々。饗宴の舞台裏には、このような人々の試行錯誤があった。

ところで、かつての御会食所の建物は平成の世に現存する。それが明治記念館本館で、現在は明治神宮の結婚式場として新しい時代に息づいている。共著者の山崎によれば、明治宮殿が空襲で焼失した今では、明治天皇が使用した宮殿建築唯一の遺構として貴重な建造物であるという。同館では今、開館七〇周年を記念した企画展「明治宮廷のダイニングホール」よみがえる近代の饗宴」(十一月九日まで)を開催中で、筆者も企画に携わった。ここでは、味の素食の文化センターの厚意を得て、秋山徳蔵メニューカード・コレクションから御会食所の宮中献立全一六点を展示している。また、あのヴィルヘルム親王との食卓をまるごとレプリカで再現した。明治記念館西洋料理総料理長に監修を依頼し、試作から完成まで三ヶ月を要したが、日本の食玩文化のレベルの高さに唸るばかりだった。明治天皇や伊藤公が食した「牛ヒレのベック風」や「トリユフ入り七面鳥のロースト」を、是非目からご賞味いただきたい。そこには、一枚のメニューカードから広がる食卓の外交を巡ったドラマがある。

明年は、明治維新から一五〇年の節目を迎える。同時に安政五カ国条約が米蘭露英仏の各国と結ばれてから一六〇年の年回りでもある。じつは、この五カ国条約こそが世にいう不平等条約だった。「修好」の始まりとはまた、条約改正への長く険しい道の始まりであったことを改めて想起し、歴史を前に進めるためそれだけの持ち場で力を尽くしたあまたの先人たちに思いを馳せたい。

(明治神宮国際神道文化研究所主任研究員)

カラーとモノクローム——広告史の狭間で

たけ
うち
ゆき
え
竹内幸絵

今年の六月、こんな情報を耳にした。

「日本新聞協会は、新聞カラー広告の色見本基準「NSAC（エヌザック）」を更新。二〇〇六年一〇月の策定以来、一年ぶり」。

エヌザックとはNihon Shimbun Ad Colorの略称。新聞のカラー広告を原稿どおりの色に仕上げるために業界が定める「色見本」である。作り手がチャートにのっとって色指示を出し、新聞社は意図通りの色で印刷を実現する。カラー広告の足元を固める道具ともいえるチャートが一年もの間変わっていなかったことに軽い驚きを覚えつつ、新聞にカラー広告が載る今日の「あたりまえ」があたりまえになるまでを思った。

新聞のカラー刷りはいつだって、いつ始まったのだろう。調べてみると、正月付録などでは一九二〇年代にすでに色刷りで提供された例があったようだ。しかしこれは印刷を外注した別刷で、新聞本紙のカラー化ではない。新聞本紙上でのニュース写真のカラー化は、というところ東京オリピックまで待たねばならない。この時は新聞各社がこぞって掲載したが、時間もかかりプロセスも不安定なため、短期集中の五輪報道には対応できても日常作業と

しては問題があったという。つまり一九六四年時点でもカラーのニュース写真はまだ一般的ではなかったのである。

では広告は？ いつからカラーになったのだろうか？ 別刷付録ほどではないにせよ、広告は、ニュース写真よりも印刷に準備時間をとることができる。ニュースよりも早く本紙上でのカラーを実現していそいだ。手元の古い雑誌を繰ると、このような記事に出くわした。一九三三年に遡る。

「新聞が必然的に黒色一刷りであることを我々は当然として満足しなければならないのでしょうか！」と謳って、時事新報が色刷広告を始めてから、すでに半歳を経た。時事に云はせると、色刷広告は「新聞の天然色オール・トーカー」であり「これが一九三三年の新広告」であると謂ふ。

（倉本長治「色刷新聞広告に就て」『広告界』一〇巻第九号、誠文堂新光社、一九三三年）

戦前、新聞が最大の媒体として覇権を握っていたころ、カラー広告の先陣を切ったのは、福沢諭吉が興した『時事新報』だった

のだ。「天然色オール・トーキー版」という言い回しもなんととも面白い。本格的なトーキー映画の封切は一九三二年だからトーキーは当時新進の技術。カラー広告はそれと同じに新しく、多弁で情報満載というわけだ。

ところでこれを書きつつ私は、広告論という授業のレポートを読んでいる。商学部の学生がこんな表現をしていた。「次々と新奇で多弁な手法を探し、購買をそそる。それが広告だと思う」。彼の眼にある「広告」は新聞広告ではなくデジタル広告である。大学生らにとっての「多弁な広告」は、手の中の小さな画面に高精細の画像が登場し滑らかに動き語り出すものだ。新聞にカラー広告が登場してから八〇年余りの歳月で、なんと大きくメディア環境が変わったことだろう。音声付きの映画やカラーの広告が新奇だった時代から今日まで。この間のメディアに、広告に、何が起き、どう変化してきたのか。

このたび思文閣出版から発刊する『広告の夜明け——大阪・萬年社コレクション研究』は、その時々新しく多弁な表現を創り続けてきた広告の、見過ごされて来た歴史の空白を埋めようとする試みである。今日の私たちにこれほどまでに身近である広告、しかし広告が広告として多弁に機能するにいたるまでの過程は、意外なほどに知られていない。本書の範囲は、明治・大正・昭和戦前期。この間に新聞広告の価値を高め、広告の市民権を獲得し、挑戦を繰り返しながら拡大していった大阪の広告代理店を同書の背骨としている。商業主義の拡大、新聞そのものの大きな変化と

の帯同、大阪と東京の立ち位置の変化、博覧会との協働、そして戦争へと進む国家への協力まで。振れ幅の大きかった時代の中で「多弁な広告」の立ち振る舞いを、一〇人の執筆者が個性豊かに切り込んでいる。そこにあるのは常に新奇性を追う広告の姿だが、読むうちに不思議と広告の普遍性も見えてくる。

さて冒頭に示したエヌザツクの新チャートは、もちろん従来よりも高精細だそう。より精密な表現を目指し色の情報量を増やそうとする試みは、多くの分野で現在も進行中だ。二〇二〇年の東京オリンピックでは8K放送も予定されているという。先ごろ発見された一九三五年の沖繩の写真に人工知能を使って色をつける「よみがえる沖繩」の試みも、最新技術の挑戦である。もちろん色付きの沖繩の風景はより生々しく当時を彷彿させてくれる。しかしカラーは、単にカラーだから多弁なのだろうか？

この夏、京都文化博物館で開催された「パリ・マグナム写真展」を展覧した。一九三〇年代以降各時代のパリの日々を捉えたモノクロームの写真たちの後に、最新のデジタルカラー写真によるパリの姿が展示されていた。鮮やかな色と光の美しい表現。しかし私にはそれらのメッセージは薄くぼんやりとしてみえた。色数と高精細の追求だけが「雄弁」を創るものではない。「広告の中の色……時代によってその色彩が明らかに動いて居る」(宮下孝雄「広告と色彩表現」『広告研究』日本電報通信社、一九四〇年)。暗いギャラリーの中で、そんな言葉を想うひとときとなった。

(同志社大学教授)

香を聞きながら

京は御所の西、江戸時代の儒者皆川淇園（二七三四―一八〇七）の学問所「弘道館」^{こうどうかん}址の数寄屋建築が取り壊しの危機に遭っていたところを、茶道や香道、能楽、和歌などの芸能を通じた人間育成機関として再生させて八年。江戸時代には全国から門弟が三千人集った場であるにもかかわらず、当時は、それを知るよすがは大正期に建てられた石標ひとつで、近所の方々にも「弘道館」という名すら知られていないという状況であった。しかも、建物と庭はかなりの手入れが必要な状態で、「再生」には多くの資金も必要であった。私はといえば、当時大学の非常勤講師を務めながら伝統文化に関する執筆やプロデュースの仕事をしていたが、そのような資金はどこにもなかった。しかしそれでも、どうしてもこの場を残し、学問所として再生させる必要があると、強く思ったのだ。そうして、八年。ふたたび多くの人々が集い、伝統文化の素晴らしさを学び、感じとり、先人への敬意をもって、また新たな形で伝承・展開していこうとする動きが、この地に立ち起こっている。一方で、この八年の間に、近くの美しい町家や庭が、次々と壊されていった。

濱崎加奈子^{はまさきかなこ}

現代の学問所として弘道館を再生させようと決意してから、最初にはじめたのは、皆川淇園とその周囲の人々に関する勉強会だった。皆川淇園という人の哲学・芸術・科学など、多岐にわたる才は、研究者ひとりの力ではその全貌を掴むことが難しい。そこで近世京都学会が設立され、現在、研究活動が進められている。

また、残された建物を生かしながら、茶会や香会、講演会、展覧会などを行ってきた。弘道館という「場」を体験することによって、どのような「学び」が得られるのかということを実証しながら、学問所としての新たな育成プログラムを構築している。これは、学問所としての実際の機能を果たしながら、同時にそのプログラムを開発・更新し、結果的に現場に還元し、また同時に建物を再生させるという取り組みである。またこれらを通して、このような伝統的な建物や庭がなぜ必要なのかを考えることも大きな目的である。それが説明できなければ、茶や香が育まれた場は、失われ続けていくだろう。

ひとことでいえば、それは、「文化と経済」の問題なのかもしれない。（目にみえるもの）（言葉で説明できるもの）として、そ

の価値を提示せよという、圧力とでもいえる空気が、文化の現場に押し寄せている。

弘道館再生の道のりにおいて、つねに念頭にあるのは、中世の連歌サロンであり、そこから展開した茶・花・香といった芸術文化サロンである。江戸時代の学問所の再興ではあるが、その文化的な根源を辿れば、中世に思いを馳せざるを得ない。中でも注目すべきは、たとえば茶道は茶道としてそれだけで成立したわけではなく、さまざまな知や技をもった人々が集うなかで育まれ、のちに茶道や香道などの形として伝えられてきたということである。

とかく現代は「茶道」「香道」といった〈いま〉〈目に見える〉枠組みのなかでしか、ものごとを捉えられない傾向にあるように思う。先日、「茶道はどうしてそんなに〈型〉が重要なのですか。型から入ることが現代にウケない理由なのでは」との意見をいただいた。たしかにそうかもしれない。しかし、「型があるからこそ面白い」と主張される方も多いだろう。私もその一人である。が、待てよ、そもそもそれらの芸能が「型」から生まれたのかという点、そうではないだろう。そうだと、いつ、どこで、どのようにして型が生まれたのかを探らねばならない。果たしてそれを探求する旅に出ること、つまり、いま目の前に伝えられている伝統文化の源へと思いを馳せることで、その文化の根本や、何をどのように残すべきか、伝えていくべきかが見えてくる。目新しいコラボレーションよりも何よりも、原点に立ち返ることこそ、

伝統文化の現代における「再生」の、早道ではなからうか。

日本人は目にみえないものを尊ぶ心を大切にしてきた。とりわけ伝統文化においては、目に見える「型」を用いながら、実は目にみえない何かを伝えているということが多々あるのであって、そこを解しなければ、それらをひもといたことにはならない。そんな日本人の感性を見事に——しかし隠された形で——あらわしているのが、とりわけ「香道」ではないだろうか。

香道は、香木の香りを楽しむ芸能である。「匂いをかぐ」というただそれだけの行為が、香道にまで高められたのは、世界でも類を見ない特異な現象であろう。先述の有斐斎弘道館には、日々海外からも賓客が訪れるが、彼らがもつとも不思議に思うのは茶道や花道ではなく、香道である。香りという、目にみえないものを「道」にまで仕立てあげ、しかも五百年ものあいだ伝えてきているというのは、一体どういうことなのだろうかというのである。

実は、香道は、嗅覚だけでは成立しない。重要なのは、他ならぬ「言葉」である。茶器に銘をつけるように、香や香の遊びに名を付けて、背景にある和歌とともに、連歌的なイメージ構築の手法によって香りの世界を楽しむのが、香道である。

香は、決して言葉では説明できない。いかなる匂いも、それがどのような匂いかということを、言葉で的確に相手に伝えることはできない。にもかかわらず、言葉が重要な役割を果たす芸道の世界とは——。有斐斎弘道館の座敷で、香を聞きながら、今日もまた、考えをめぐらせている。

(専修大学准教授)

ビタ一文の歴史学

高木久史

大阪生まれの私でさえ実生活で接することがないネタ的な大阪弁だが、「ビタ一文まかりまへん」という表現がある。ごくわずかな金額もデイスカウントしない、といった意味だ。

「ビタ一文」とは何か。前近代の日本では、主に青銅で出来た、円形で中央に四角い孔がある塊を銭と呼び、通貨として使った。『忍たま乱太郎』のきり丸が好きなアレである（なお、「銭形平次が投げていたアレ」といっても平成生まれの学生には通じない）。日本古代には和同開珎などの銭を律令政府が発行した。中世では中央政府は銭を発行せず、中国などから銭を輸入した。また、研究者以外にはあまり知られていないことだが、当時日本では民間レベルで中国銭を模造（悪く言えば偽造）していた。これらが通貨として使われた。

さて「ビタ一文」の「一文」は通貨単位である。中世日本ではどの銭も原則として額面一文とされた。「ビタ」は、辞書によれば、輸入偽造銭や摩滅・欠損が激しい粗悪な銭で、額面より減価された、とある。しかし近年の研究は、ビタを単なる粗悪銭ではなく、輸入・国産を問わない雑多な銭の集合体で、近世初期の通貨シス

テムの主軸となったもの、とポジティブに捉えている。

ビタの最古の記録は、日本初の俳諧連歌集『竹馬狂吟集』（明応八年（一四九九）成立）に収録されている「百びたをよめをもたたで還りけり くくりはかまは十がしち」という歌である。「ビタでちょうど百文、端数の額を持つことなく帰った。嫁のくくり袴を百文分の質に入れたから」いった意味である。「よめ」は余目（余り。この場合は端数額）と嫁とをにかけている。くくり袴とは裾にひもを通した袴である。ひもを絞るとひだができる。これをビタとかけている。なお大十は百の意味である。

この歌がいうビタの内実は不詳であるが、その実態がわかってくるのが信長・秀吉の時代である。本能寺の変があった天正一〇年（一五八二）の伊勢の借金証文に、「ひた」のうち、欠損銭・文様が無い銭仕上りが悪い未成銭などを取り除いて授受した、と記されている（中京大学の千枝大志氏の業績による）。つまり、雑多な銭の集合体（広義のビタ）から最低品質銭を除いた残り（狭義のビタ）が通用したことがわかる。

一五七〇年代から八〇年代にかけて、ビタの価値は上昇傾向に

あった。銭への需要が増えていた一方で、輸入量が減るなどして供給が追いつかなかったため、従来であれば減価されていたビタの価値が高まったわけだ。また同じころの畿内では、ビタ一枚で一文とする経理が行われるようになる。従来の基準銭（一枚で一文として通用する銭）の供給が足りないもので、いっそビタ一枚で一文ということにしてしまおう、と人々は考えたらしい。

以上は民間慣行・社会の実態レベルの話である。これをうけて信長・秀吉・家康はビタを基準銭に採用した。江戸幕府は寛永一三年（一六三六）に寛永通宝を発行し、これをビタと等価とした。つまり民間慣行の中から登場したビタに依拠して統一政権は銭制度を整備し、最終的には江戸幕府もビタの価値をそのまま引き継ぐ銭を発行したわけだ。

寛文一〇年（一六七〇）、幕府はビタの通用を停止し、通用する銭は寛永通宝のみとなった。一八世紀には鉄製の寛永通宝（額面一文）が発行され、これが幕末から明治初期に鏝（びた）と俗称された。ビタ一文＝超微細額、というイメージが定着するのはむしろ、このころかもしれない。

このたび発表した『近世の開幕と貨幣統合』では、銭・金貨・銀貨によって構成される江戸幕府の貨幣制度、すなわち三貨制度の成立過程を追った。銭に関する分析の中で、先に挙げた例以外にも、畿内近国をはじめ様々な地域におけるビタに関する興味深い記録を紹介している。国家統一に向かう時代の経済・貨幣のダイナミズムを本書で感じていただくことができれば幸いである。

（安田女子大学准教授）

近世の開幕と貨幣統合

—三貨制度への道程 高木久史著

歴史上には、かつて数々の貨幣（通貨）統合が存在した。日本においては、「三貨制度」と呼ばれる貨幣様式の統一が知られている。十六世紀に民間で自生的に成立した貨幣システム（金貨・銀貨・銭）をベースに、信長・秀吉・家康政権の時代を通じて、近世的な貨幣統合が政策的に達成された。

本書は、地域別の定点観測的な事例研究に基づき、その統合過程を復元しようという試みである。

内容

- 序章 問題の所在—三貨制度の形成過程を考える
- 第一章 交通集中点に生まれた近世的銭統合の萌芽—近江の状況（一）
- 第二章 金・銀の普及と羽柴秀次のインフラ整備—近江の状況（二）
- 第三章 江戸幕府の貨幣統合政策と彦根藩の対応—近江の状況（三）
- 第四章 東西結節点に見られる近世への傾斜—紀伊の状況
- 第五章 もう一つの東西結節点はどう特殊か—伊勢の状況
- 第六章 京都隣接地域の独自性・共時性—摂津の状況
- 第七章 生野銀山を挟む南北の対称と非対称—播磨・但馬の状況
- 第八章 毛利領国における銭の未統合—出雲の状況
- 第九章 瀬戸内海南岸の銭秩序—伊予・讃岐の状況
- 第十章 江戸幕府に先行する銭生産—九州北部の状況
- 第十一章 国産銭に関する江戸開幕以前の法制
- 第十二章 紙幣前史—中世手形類の技術的到達点
- 第十三章 近世貨幣統合の経緯を振り返る
- 終章 三貨制度成立過程の政策的ロードマップ
- 補章 醍醐寺僧房女は銭の夢を見る

たかぎ・ひさし：一九七三年大阪府生、神戸大学文学部卒業、神戸大学大学院人文学研究科修士、博士（学術）、安田女子大学文学部准教授。

トルコの宮殿を彩る明治日本美術工芸品

—— ジラルデツリ青木美由紀 あおき みゆき ——

二〇年以上前、トルコへ留学してすぐの頃の話である。ハタイというシリア国境に近いトルコの街に、日本から訪ねてきてくれた友人と二人で旅行し、地元の名物菓子「キユネフェ」を楽しんだ。お勘定を、というと、「もう済んでいます」と言われたことがある。見ず知らずの人が、わたしたちに知らせることもなく、支払って、去って行ったというのだ。わたしたちが、遠い日本からやってきたというだけで。

そんなトルコの親目よりは、しかし、背景を紐解けば、少々きな臭い。話は明治時代にさかのぼる。西洋列強との不平等条約に苦しむ明治政府が条約発効延期の交渉に派遣した岩倉使節団は、オスマン帝国に分隊を派遣した。同じく不平等条約の歴史のあったオスマン帝国の法制調査のためである。岩倉遣欧使節団の一等書記官の立場で渡航した福地源一郎と帯同の島地黙雷が、公式記録に残る彼の地に渡った最初の日本人である。当時宿敵・ロシアの南下政策に苦しんでいたオスマン帝国のスルタン、アブデュルハミット二世は、明治天皇へ使節を派遣する。背景には、アジアのムスリム同胞の連帯、日本との同盟であわよくばロシアを挟み

撃ちにできるとの目論見があった。

使節を乗せた軍艦が、帰路、和歌山県串本沖で遭難した惨事はエルトゥールル号事件として知られる。しかし、話は日土のあいだのお涙頂戴の逸話だけでは終わらない。日本はその後、日清・日露の戦争に勝利し、新興の帝国主義国として国際舞台に現れた。時、あたかも万国博覧会の時代、西洋の一般庶民には未知だった日本の文物はもてはやされ、その流行はジャポニスムと呼ばれた。そしてオスマン帝国は、その日本に注目し続けていたのだ。

その文脈で、今、トルコで始まった動きがある。

トルコ国立宮殿局所蔵の日本美術工芸品の調査である。国立宮殿局とは、トルコ大国民議会直轄の機関で、一九世紀以降建造された一〇あまりの宮殿・付属施設を統括している。現在、宮殿は博物館と同様に一般に公開されているが、重要な会議や国賓の接待などにも使用される政治の場でもあり続けている。なかでも伝統的なトプカプ宮殿以降、近代化の象徴として建設された西洋式のドルマバフチェ宮殿は、床面積四万五千平方メートル、部屋数二八五という巨大な規模である。オスマン帝国の最後のスルタン

が幽閉され、共和国初代大統領ケマル・アタチュルクがイスタンブルでの執務の場とし終の棲家となった、歴史的な場所でもある。

その宮殿群に日本の文物が所蔵されることは長年知られていた。しかし、学術的な調査は未着手のままであった。それが、二〇一〇年「トルコにおける日本年」をきっかけとして本格的に調査されることになり、日土の共同研究が始まったのである。

有田や薩摩の大花瓶、世界でも貴重な事例である箱根寄木細工の家具、蒔絵に象牙や螺鈿で象嵌を施した贅沢な芝山細工の家具、六尺に及ぶ色鮮やかな尾張七宝、明治の一時期のみ生産された珍しい磁胎漆器……。宮殿に眠っていた日本の美が、次々と明らかになった。

トルコ国立宮殿局の全面的な協力のもと、サントリー文化財団、美術工芸振興佐藤財団などの助成を得て、日本から各分野の専門家を招待し、ワークショップが行われた。トルコからも、専門家が日本へ招聘されて日本の専門家との交流を行った。この原稿を書いている現在、ふだんイスタンブルを拠点に活動するわたしは、日本の国立研究機関である国際日本文化研究センターに招聘され、このテーマについて研究を深める機会を与えられた。

そのなかで、そう単純ではない問題が浮かび上がってきた。一見日本風に見えるが日本製ではない作品の存在である。それは、パリやロンドン、ウィーンなどおもにヨーロッパ製の日本趣味の装飾品で、巧妙に日本の七宝に似せられた陶器、一部日本製の芝山細工パネルを使ったフランス製の家具などがある。一方で、

アール・ヌーヴォーの流行に合わせて西洋的な好みに変化した日本製の工芸品もある。さらに、これらヨーロッパと日本の間の影響関係を反映して製作された、イスタンブルのアール・ヌーヴォーもある。あるいは、中国製と思われる日本風のものまで……。

トルコにある日本のものを調べましよう、と言ってはじまった調査は、「それでは、〈日本製〉とは何か」「〈日本風〉とは何か」という問題にまで、およんできた。日本美術工芸品の調査、というとき、厳密に言えば、日本製でない作品は、対象の外になるだろう。だが広い意味で、オスマン帝国の日本観、を考えると、日本製であるとなじらなくとも、日本を表象するもの」が宮殿で好んで使われたことは、その効果の点で、日本製のものとは変わらない意味を持つている。あきらかに日本製のものとは違う、大きく捉える必要があるが、それらもふくめて、緩やかに、

西洋列強の容赦なき帝国主義的思惑と、非西洋の国の起死回生の近代化の問題とががつり組み合ったいわゆるグレイト・ゲームと、今も心温まるトルコの人々の素朴な日本好きの、そのギャップは何故なのか。スルタンのコレクションとして宮殿を彩る明治日本美術工芸品は、それを埋めるヒントになるのではと考えている。そして最近では、もう一方の側、明治以来の日本人のトルコ観というところまで関心の幅が広がってきた。

相互に響き合う影、文化の研究とは、まさにそういうことなのかもしれない。

(イスタンブル工科大学非常勤准教授補)

史料

探訪

(66)

戦後大阪マンガ界の痕跡

—小寺鳩甫・酒井七馬・手塚治虫—

(京都精華大学国際マンガ研究センター 研究員)

雑賀忠宏
さい か ただ ひろ

京都国際マンガミュージアムは、京都市中京区烏丸御池に位置する旧・龍池小学校をベースに、京都精華大学と京都市との共同運営事業として平成一八年（二〇〇六）一月に開館した。当館の特色は、特定の作家・作品に限定せず幅広くマンガ資料を収集・保管・展示するという総合的アーカイブ施設としての機能と、館内に置かれた京都精華大学国際マンガ研究センター（IMRC）が担うマンガに関する調査研究施設としての機能とを併せ持った、「マンガ文化」に関する総合的文化施設という点にある。

現在約三〇万点を数える収蔵資料のうち、五万点は単行本を主に「マンガの壁」と名付けられた開架図書として来館者に広く公開されており、館内で自由に読むことができる。一方、地下にはマンガ史研究の泰斗である清水勲の収集した、近世の浮世絵および明治・大正・昭和初期の風刺漫画雑誌群を中心としたコレクション（「清水コレクション」）や、一九六〇年代以降を主とする各種マンガ雑誌のコレクションなどが収蔵されている。

さて、こうした近世末期から現代にいたる多種多様なマンガ資料のなかで今回紹介したいのは、戦後間もない一九四六年一月

に大阪で創刊された児童マンガ雑誌『ハローマンガ』の第五輯（育英出版刊、一九四七年二月一日発行）だ。表紙を含めわずか二〇頁のこの雑誌の巻末には、のちに「マンガの神様」と呼ばれるようになる手塚治虫（一九二八〜八九）の名を世に知らしめた記念碑的作品『新宝島』の出版告知と、若き手塚による「テヅカオサムシ」名義の四コママンガが掲載されている。そして、この雑誌の表紙を描き、さらには実質的な編集人も務めたのが、『新宝島』の「構成」者としてもこの出版告知に名を連ねている、酒井七馬（一九〇五〜六九）というマンガ家だ。

酒井は戦前の大阪で発行され、大いに人気を博していた風刺新聞『大阪バック』の主筆であるマンガ家・小寺鳩甫（一八八九〜一九六二）に師事し、風刺マンガ家として世に出たのち、戦後には大阪の小出版社が刊行していた子供向けマンガから様々な雑誌のカット、そして紙芝居（左久良五郎名義）まで八面六臂の活躍を見せた、終戦直後の大阪マンガ界における長老格のひとりである。また酒井は、若いマンガ家志望者たちとの交流を好んだ。

「関西マンガマンクラブ」や「関西児童漫画協会」といった、関西・

大阪の若いマンガ家とその卵たちの交流関係が、彼を中心として作り上げられていったのである。

酒井が会長を務める「関西マンガクラブ」の会誌という体裁で出された雑誌『まんがマン』三号（一九四六年八月二五日発行、当館所蔵）に、手塚の入会についての一文が掲載されている



『ハローマンガ』第5輯（育英出版、1947年）表紙（右）と手塚治虫画『ゾウノシンセツ』および『新宝島』新刊告知（左）（京都国際マンガミュージアム蔵）

ことから窺えるように、手塚もまた、戦後すぐにこうした酒井の周辺に広がる大阪マンガ界人脈へと加わっていくことになる。若き手塚の洗練された絵に目をつけた酒井は、大阪の出版社である育英出版から依頼されていた長編マンガ作品の仕事を共作としてもちかけた。こうして世に出たのが『新宝島』であり、「戦後ストーリーマンガ」のはじまりとしてのちに伝説化されていくこの作品は一方で、酒井を中心とした同時代のローカルな人的ネットワークから生まれ落ちた「大阪発」のマンガでもあったのだ。こうした酒井の活動と生涯については、中野晴行による評伝『新寶島』の光と影——謎のマンガ家・酒井七馬伝（小学館クリエイティブ、二〇一一年）に詳しい。

『ハローマンガ』の執筆陣には実質的な編集人を務めた酒井を中心とした、戦前から戦後へとつながっていく大阪マンガ界の人脈が反映されている。表紙や冒頭の三コママンガ「ゾウノオミヤゲ」を描く酒井の筆は、丁寧で明確な輪郭線を持った、アメリカの新聞コミックスの影響を感じさせるモダンなタッチだ。一方、酒井の師である小寺鳩甫もかなりの数の作品を寄稿しているが、ふっくらした丸顔の子供が特徴的な彼の絵柄とゆつたりとした話運びは、戦前にも執筆していた児童マンガ作品から変わらぬ牧歌的な雰囲気漂わせている。そしてこの先達ふたりに対して棹尾を飾る若き手塚の「ゾウノシンセツ」を特徴づけるのは、すっきりとした描線と、洗練された吹き出しの用い方による話運びである。このうち、手塚はその卓抜したストーリーテリングによって人

気を集めるようになり、一九五〇年代に東京の雑誌へと仕事の場を移してからは、数々の長編によって「戦後ストーリー、マンガ」という領域を代表する作家とみなされていく。それに対し、酒井や小寺はマンガのほかに紙芝居やポスター、絵物語、挿絵などを描きつつ、「絵」を仕事として終生大阪に留まり続けた。マンガのありようが戦前から戦後へと移り変わっていく端境期^{はぎかい}の瞬間を、『ハローマンガ』の誌面は大阪というローカルな場所に存在したマンガ界の痕跡とともに留め置いている。

なお、二〇一六年のはじめ、小寺鳩甫が終^{つひ}の棲家とした大阪・伊丹の小寺家改築に際して、鳩甫が遺した画稿や写真、スクラップブックなどが大量に見えられ、うちマンガに関する資料は小寺家から京都国際マンガミュージアムへと寄贈された。この新資料をもとに、大阪府立中央図書館国際児童文学館での「関西マンガ界の伝説 酒井七馬とその時代」展(二〇一五年)を増補するの^ぎたちで京都国際マンガミュージアムにおいて催されたのが、「小寺鳩甫と酒井七馬」『大阪バック』から「新寶島」まで」展(二〇一六年)である。小寺鳩甫資料は現在も整理作業が進められており、手塚をはじめとする戦後ストーリーマンガの時代へといたる前史として存在した、戦前からの大阪マンガ界を窺う新たな手がかりとして期待されている。

— MEMO —

京都国際マンガミュージアム

【所在地】

〒604-0866 京都市中京区烏丸通御池上ル(元龍池小学校)

TEL: 075-1254-7414 (代)

FAX: 075-1254-7424

<https://www.kyotomj.jp/>

【交通アクセス】

京都市営地下鉄烏丸線・東西線烏丸御池駅2番出口より徒歩2分
京都市営バス 15、51、65系統 烏丸御池停留所下車すぐ
京都バス 61、62、63系統 烏丸御池停留所下車すぐ

【開館時間】

午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)

【休館日】

毎週水曜日(休祝日の場合は翌日)、年末年始、メンテナンス期間
開館カレンダー <https://www.kyotomj.jp/opening-cost/>
※休館日、開館時間は予告なく変更する場合がありますので、予めお問合せください。

【入場料】

大人 八〇〇円 中高生 三〇〇円 小学生 一〇〇円

※当日に限り再入場可能

※団体(二〇名以上) 割引有り

【現在開催中の企画展】

「クッキングババ展 旅する。食べる。料理する。」

〈第1期〉2017年9月16日(土)～11月19日(日)

〈第2期〉2017年11月23日(木)～2018年1月14日(日)

「イケメン展示 彼と過ごした恋の園」展(京都国際マンガ・アニメフェア2017 連動企画)

会期 2017年9月16日(土)～11月7日(火)

▼先日、新聞で「書店ゼロ自治体」が全国の自治体・行政区の2割強を占めるとの記事がありました。生まれ育った町、慣れ親しんだ場所に本屋がなくなると、とても寂しく思いますが、ネット書店の勢が増していくのを日々痛感しております。しかし、ネットやスマホでは本の中身がわからないので、やはり現物を手に取って本当にはしい本かを判断するのは、リアル書店が一番かと思えます。何気なしに入った書店で意外な掘り出し物を見つけた。カバーなど装幀が気に入り、中身を確認する。ネット社会の今だからこそ、中身の価値が問われるかもしれません。(一)

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※日付は小社の出店予定日

日本史研究会（京都学園大学）

10/7（土）・8（日）

日本民俗学会（佛教大学）

10/14（土）・15（日）

中古文学会（静岡大学）

10/28（土）・29（日）

日本社会学会（東京大学）

11/4（土）・5（日）

佛教史学会（龍谷大学）

11/18（土）

日本仏教総合研究学会（名古屋市立大学）

12/10（日）

▼学問は面白いことが一番大切という井上先生のお話、心から賛同します。私も、へえとかほおとか言いたくて、この仕事をしています。(M)

▼夏休みに親戚と男鹿半島をドライブ。お昼ご飯のとき「焼きハタハタ寿司」を注文すると魚だけ出てきた。寿司にもお国柄があるようです。(大)

▼学生の頃、夏と冬は有明のシャッター前を陣取ってましたが、名刺を武器に「戦場」を奔走する編集者の気持ち、今はよくわかります。(理)

▼娘の通う中学校で夏休み明けにクラス対抗ピバリオバトルがあるとのこと、ついついあの本この本と時代遅れの本を推してしまう父です。(h)

▼今夏も暑かった。体温のような気温に目は慣れて驚かなくなつたけれど、体はというと、年々しんどさが増して……どうすれば良いですか？(き)

▼表紙図版：『広告大福帳』創刊号（一九〇四年、表紙／『広告の夜明け』大阪・萬年社コレクション研究』より）

【お詫び】前号の表紙図版：三十三間堂（Carl Skoggaard-Petersen, *Fru Nidilens Japan*, 1911 / 『アンマーク人牧師がみた日本』より）は、通路を挟んで仏像が向き合うように合成された写真です。関係各位のご指摘・ご確認にお礼申し上げます。にも、誤解のありましたこと謹んでお詫び申し上げます。(編集部)

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年2回（4・9月）刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おとうつつしん
鴨東通信

No.105

2017（平成29）年9月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

朝日カルチャーセンター・京都教室

×思文閣出版 コラボ企画

思文閣文化サロン

教養・趣味など多彩な講座を展開する朝日カルチャーセンター・京都教室とタッグを組み、思文閣出版選りすぐりの著者による講座を、この秋より開催します。会場は京都の古美術街に店を構えるぎやらりの思文閣。美術・骨董の逸品をしつらえてお待ちしております。【要予約】

◆お申し込み・お問い合わせ

朝日カルチャーセンター・京都教室

◆受講料（資料代を含む）

一般…三、七八〇円（会員…三、四五六円）＊税込

◆定員 各回二〇名

＊1月以降も毎月1回開催予定です

＊第2回＊

10月21日（土） 14時～ @ぎやらりの思文閣

講師…中川理（京都工芸繊維大学教授）

「近代京都の記憶」都市空間と建築から読み解く



場所・人・建築をキーワードに、作られた歴史都市「京都」の近代化の過程を分析する。

◆関連図書

『京都 近代の記憶——場所・人・建築』

定価…本体二、二〇〇円（税別）

朝日カルチャーセンター・京都教室

〒604-8005

京都市中京区河原町三条上ル京都朝日会館8階

tel: 075-231-9696

https://www.asahiculture.jp/kyoto

＊第3回＊

11月25日（土） 14時～ @ぎやらりの思文閣

講師…井上章一（国際日本文化研究センター教授）

「学問の裏と表」



言論の制約、社会の空気、人間関係…、学問をしるる諸要素から自由とは何かを考える。

◆関連図書

『学問をしるるもの』【近刊】

定価…本体二、五〇〇円（税別）

＊第4回＊

12月24日（日） 14時～ @ぎやらりの思文閣

講師…ジョン・ブリン（国際日本文化研究センター教授）

「変容する聖地」王政復古にみる伊勢神宮



明治維新・近代国家の確立期に大きく変化をした「聖地」伊勢の空間変容を跡づける。

◆関連図書

『変容する聖地 伊勢』

定価…本体二、八〇〇円（税別）

高木久史 (安田女子大学准教授) 著

近世の開幕と貨幣統合

三貨制度への道程

8月刊行

A5判・三〇四頁／本体六、五〇〇円

安国良一 (住友史料館副館長) 著

日本近世貨幣史の研究

A5判・三三〇頁／本体六、八〇〇円

住友史料館編

住友の歴史「上・下巻」

近代の財閥につながる豪商住友の歴史をわかりやすく紹介

(各) 本体一、七〇〇円

今井典子著

近世日本の銅と大坂銅商人

大坂銅商人社会を軸に、銅の生産・流通の歴史を通覧

本体七、五〇〇円

現在の貨幣システムや貨幣統合を考えるためのヒントが、近世開幕期にある！

16世紀に民間で自生的に成立した貨幣システム(金貨・銀貨・銭)をベースに、信長・秀吉・家康政権の時代を通じて、近世的な貨幣統合が政策的に達成される、その統合過程を復元しようという試み。



日本の歴史上、近世ほど多種類の貨幣が流通した時代はない。金・銀・銭という幕府制定の「三貨」、近世初頭の大名領国にみられる金銀貨「領国貨幣」、藩札や私札の紙幣などを加えればその数は膨大である。本書は、この一見矛盾する貨幣の特質を明らかにすることを試みる。

近世貨幣はどのように生まれ、流通し、終焉をむかえたのか——。
一國一通貨という貨幣観を解きほぐし、その独自の機能や意味づけを問
いなおす良著。

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

大航海時代の日本と金属交易

最新の鉛同位体比分析から、金属流通・南蛮貿易の意義などを提示

本体三、五〇〇円

荻慎一郎著

近世鉱山社会史の研究

技術受容と生産体制、鉱山法や住民の社会生活などの実態を明かす

本体二二、八〇〇円

吉川真司 (京都大学教授)
倉本一宏 (国際日本文化研究センター教授) 編

日本の時空観の形成

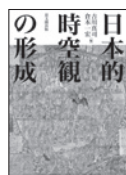
5月刊行

A5判・六〇八頁／本体 一二、五〇〇円

周囲を海に囲まれ、四季がはっきりと分かれる地理的・気候的環境のなかではぐくまれた日本の伝統的な世界観はいつ、どのように形成されたのだろうか。

文献史学 (日本古代史・日本中世史・アジア史)、考古学、歴史地理学、国文学の研究者による個性的な書き下ろし論文24編。

古代から中世にかけての日本の時空観の形成・定着のプロセスを具体的かつ実証的に明らかにする。



寧楽美術館編

寧楽美術館の印章

—— 方寸にあふれる美 ——

10月刊行予定

B5判・約二〇〇頁／本体四、〇〇〇円



日本における印章五大コレクションのうちの一つ、寧楽美術館所蔵の国古印コレクションの中から、このたび整理の終わった、代表的な二十九類を紹介。

官印・私印を年代順に掲載する。整理にあたっての断代 (時代判定) 手順など、くわしい解説も収録。

★二〇一七年一〇月から寧楽美術館にて刊行記念展覧会が行われます。ぜひ実物を見ながらお楽しみください。

中野渡俊治著

古代太上天皇の研究

奈良・平安時代における太上天皇の地位の歴史の変遷を解明する

本体 五、四〇〇円

山下克明著

平安時代陰陽道史研究

陰陽道の日本的特質をさまざまな角度から明らかにする

本体 八、五〇〇円

山崎寛士著

中国五代国家論「オンデマンド版」

五代十国時代における「国家」の構造を明らかにする意欲作

本体 七、三〇〇円

小林仁著

中国南北朝隋唐陶俑の研究

豊富な実物調査に基づき、美術史・陶磁史的視点から論じる

本体 一三、〇〇〇円

田島公 (東京大学教授) 編

禁裏・公家文庫研究 第六輯

9月刊行

B5判・四三六頁／本体 一五、〇〇〇円

藤田保幸 (龍谷大学教授) 編

龍谷大学善本叢書

中世国語資料集

10月刊行予定

A5判・三四四頁／本体 一七、四〇〇円

坂本亮太・末柄豊・村井祐樹編

高雄山神護寺文書集成

神護寺伝来の中世文書 (寺外流出分含む) 総数四九六点を編年して配列

本体 一二、五〇〇円

赤松俊秀校訂／『隔笈記』研究会編

隔笈記「全7巻／本篇6冊・総索引1冊」

鹿苑寺住持鳳林承章の自筆日記の活字化、近世社会を知る最重要史料

本体 七〇、〇〇〇円

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介、データベースを収載するシリーズの第六輯。

〈内容〉

序 (西本昌弘) 【第一部】 前久が手にした関ヶ原情報 (藤井讓治)／尊經閣文庫所蔵「無題号記録」の書写年代について (惠美千鶴子)／宮内庁書陵部所蔵九条家本「諸次第等目録」について (神戸航介)／陽明文庫所蔵「勘例」十三函十八号における先例記事の特徴 (黒須友里江) 【第二部】 大日本古記録未収の「猪隈関白記」原本・古写本 (尾上陽介)／陽明文庫所蔵「藤原師実執筆除目所付関係史料」三点的紹介 (田島公)／宮内庁書陵部所蔵九条家本「定能卿記部類」六「御読経」七「御願供養」 (藤原重雄)／陽明文庫所蔵「長谷寺縁起文」の解題と翻刻 (田島公)／「院中御湯殿上日記」 (天正一五年八月〜二月記)の紹介 (遠藤珠紀) 【第三部】 宮内庁書陵部所蔵御所本目録 (稿) (小倉慈司)

龍谷大学図書館所蔵資料より、国語学的に貴重な資料をえらび、カラー口絵・影印ならびに解説を収録。

〈内容〉

影印

職原抄

異名尽

名目抄

解説

(宇都宮啓吾／三宅えり／余田弘実)

大取一馬責任編集

中世歌書集

愚見抄／光岡百首／詞字注／自讀歌注／九代抄の影印公刊、解説付き

本体 一三、三〇〇円

中本大編

名庸集 影印と解題「全3巻」

中世・近世の文学史・美術史などの研究に資する史料の影印収録

本体 三八、〇〇〇円

横山輝樹 (伊賀市歴史研究会臨時職員) 著

徳川吉宗の武芸奨励

近世中期の旗本強化策

7月刊行

A5判・二六四頁／本体七、五〇〇円

太平の江戸時代中期、質実剛健の士風はすたれ、幕府の中核部隊であるはずの旗本五番方の面々は満足に乗馬も出来ない体たらくであった。こうしたなか將軍となった徳川吉宗は、新旧さまざまな武芸奨励を実施し、軍事演習さながらの大規模な狩猟をも敢行した。番士を鍛え直すべく始められた、吉宗の武芸奨励の実態に迫る。



前田勉 (愛知教育大学教授) 著

江戸教育思想史研究

A5判・五九六頁／本体九、五〇〇円

エリート教育か、藩士全体の教養の底上げか――。教師による講釈か、自由闊達な議論を認める集団読書(会読)か――。

学問が出世に結びつかない身分制社会の近世日本において、ようやくつくられはじめた学校はさまざまに展開する可能性があった。学ぶ理由が明確でないなかで、学校はいかに生まれ、人々はそれになにを求めたのか。学習の方法、教育の目的に注目することで、官学／私学、儒学／国学／蘭学といった枠組みを超え、一七世紀から明治初期までを見通し、江戸教育思想史に新たな地平を拓く。

竹本知行著

幕末・維新の西洋兵学と近代軍制

大村益次郎とその継承者

本体六、三〇〇円

笠谷和比古編

徳川社会と日本の近代化

徳川日本の文明的力量に着目した、多分野の研究者論文25本

本体九、八〇〇円

笠谷和比古編

洋学史論考

佐藤昌介著

洋学の受容と発展を解明し、軍事の科学化・軍制改革などを論じる

本体七、八〇〇円

一八世紀日本の文化状況と国際環境

一八世紀日本文化の独自性にみちた発展・展開を論じる23篇

本体八、五〇〇円

冷泉為人 (京都美術工芸大学学長) 著

円山応挙論

11月刊行予定

A5判・四五〇頁／本体九、五〇〇円

安永天明期の京都画壇の中心人物であった円山応挙の作品は、当時のあらゆる階層の人々に愛好され、今なお高い人気を誇る。

応挙とはどのような画家なのか。そして、応挙の写生とは何なのか。

冷泉家二十五代当主である著者の、美術史研究者としての五十年にわたる日本近世絵画研究の成果。

河野元昭 (静嘉堂文庫美術館館長) 著

琳派響きあう美

A5判・八八〇頁／本体九、〇〇〇円

日本近世絵画史全体にわたる業績のなから、その中核をなす琳派研究を集成。

光悦・宗達・光琳・乾山・抱一・其一など、琳派と呼ばれる芸術家たちが互いにどう影響しあい、独自の美を生み出してきたのか。

今もなお人びとを魅了してやまない才能あふれるクリエーターたちの実像に迫る27篇。



島尾新・彬子女王・亀田和子編

写しの力 創造と継承のマトリクス

日本美術における模写の伝統をさまざまな角度から再検討する試み

本体四、〇〇〇円

古画備考研究会編

原本『古画備考』のネットワーク

江戸後期の古画研究ネットワークの実態を解明

本体九、二〇〇円

城市真理子著

室町水墨画と五山文学

室町時代の詩文僧による〈詩画軸制作システム〉を解明

本体六、〇〇〇円

宗像健一編著

田能村竹田基本画譜「全2巻」

図版篇は厳選作品を大型図版で収録、解説篇は総論と個別解説ほか収録

本体二八、〇〇〇円

濱崎加奈子 (専修大学准教授) 著

香道の美学

その成立と王権・連歌 (仮)

11月刊行予定

A5判・三三〇頁／本体五、〇〇〇円

香道研究にとって最も重要で、にもかかわらず最もあまいにされてきた、香道成立にいたる過程を、「王権」と「連歌」の切り口から、解明を試みる。

〈内容〉

第一章「太子」の誕生 一名香「太子」／二 香木伝来神話の変転／三 香る仏像

第二章 蘭奢待と王権 一 足利三代截香／二 織田信長截香

第三章 香と連歌 一「五月雨日記」／二「名香合」／三 連歌会と香

第二章 香の起源神話と規範の成立 一「香之記」概要／二 香伝来神話／三 中世における香書／四 規範の成立

第三章 名香と名香録 一名物と名香／二 名香リスト／三 香分類法

本間洋子著

中世後期の香文化

香道の黎明

A5判・四二六頁／本体八、二〇〇円

香 (こう) を炷 (た) き鑑賞する催しである香会と香木・薫物の贈答を香文化として捉え、香道の発生期の一次史料を基に、「香道の祖」とされる三條西実隆や「香道志野流の祖」志野宗信と香との関係の再検討、「香会」の具体的内容についての考察、天皇への香木献上や天皇からの薫物・匂い袋の下賜を数量的かつ具体的に考察する三視点から、中世後期の香文化を解明する。

香道について初めての実証的な歴史的研究。

小泉和子編

茶と室内デザイン

茶が日本住宅の室内意匠にあたえた影響についての論考10編

本体三、五〇〇円

井上治著

花道の思想

花道思想の構造と近代の変容から、挿花文化の背後にある思想に迫る

本体一、八〇〇円

国文学研究資料館編

源氏物語千年のかがやき

新出の『源氏物語团扇画帖』全54枚をカラー掲載、詳細な解説付き

本体一、九〇〇円

稲垣弘明著

中世蹴鞠史の研究 鞠会を中心に

室町後期以降の蹴鞠会挙行形態の歴史を体系的に論じた一書

本体五、五〇〇円

明治記念館開館70周年記念出版

天皇の

ダイニングホール

知られざる明治天皇の宮廷外交

10月刊行予定

▼A5判・カラー口絵一六頁十二六八頁
本体二、五〇〇円

現在、明治神宮外苑の結婚式場として知られる明治記念館の本館は、明治天皇と昭憲皇太后が外国からの賓客をもてなすため、宮中晩餐会で使用した宮殿建築の遺構である。その知られざる歴史をひもときながら、当時の宮廷外交の実状について、「建築」「テーブルアート」「人物」という3つのテーマから読みといていく。



■著者紹介

山崎鯛介 ● Taisuke Yamazaki

東京工業大学環境・社会理工学院准教授

メアリー・レッドフアーン ● Mary Redfern

チェスター・ピーティール・ライブラリー・東アジアコレクション
学芸員

今泉宜子 ● Yoshiko Imaizumi

明治神宮国際神道文化研究所主任研究員

■目次

序章 明治天皇の御会食にみられる 三つの機会とその内容

山崎鯛介

第一章 交流の建築 ―御会食所のデザインにみる 「復古」と「近代」の二面性

山崎鯛介

- 一、既存建物のリノベーションとその空間
- 二、御会食所の設計意図
- 三、明治十九年に行われた床仕上げの大改修

第二章 食卓の外交

明治天皇の洋食器と意匠をめぐる戦略

メアリー・レッドフアーン (林美和子 訳)

- 一、食卓の用意
- 二、御会食所の初日
- 三、御用食器の新古模様

第三章 饗宴の舞台裏

人物で読む明治宮殿誕生前夜の宮中外交

今泉宜子

- 一、ドレスと勲章・皇后のデイトロマシー
- 二、条約改正への道―シールト兄弟が見た明治外交―
- 三、明治天皇の料理番―大膳寮を支えた人々―

〈付録〉赤坂仮皇居御会食所の利用年表

人物索引

大塚英志 (国際日本文化研究センター教授) 編

動員のメディアアミックス

〈創作する大衆〉の戦時下・戦後

9月刊行予定

A5判・五三六頁／本体四、八〇〇円

現代の日本まんが・アニメーションにおけるマーケティング技法として注目されるメディアアミックスを、とくに戦時下日本における「動員」の技術として捉え直すことで、メディア、プロパガンダ研究史の更新を試みる、国際日本文化研究センターの共同研究成果論集。
まんが・アニメーション・映画・模型といったメディア内、およびメディア間の相互関係のみならず、多様な分野に成立した〈創作する大衆〉の「書く」「つくる」という行為や書式が、いかにして「動員」されていたのか。その諸相を描き出す。

竹内幸絵 (同志社大学教授)
難波功士 (関西学院大学教授) 編

広告の夜明け

大阪・萬年社コレクション研究

10月刊行予定

A5判・三三〇頁／本体五、二〇〇円

一八九〇(明治二三)年、大阪で一つの広告代理店が創業した——その名は「萬年社」。

戦前・戦後を通して日本を代表する広告代理店の一つとして、一九九九年に倒産するまでのおよそ百年の間に、同社が広告研究のために収集した広告資料や文献などの「萬年社コレクション」は、日本の黎明期広告業界の実態がうかがえる貴重な歴史的資料群である。

本論集では、おもに萬年社の創業時から戦前までの紙媒体資料を用いて、同時代の広告業界をさまざまな角度から活写する。

寺本敬子著

パリ万国博覧会とジャ・ポニスムの誕生

本体六、五〇〇円

佐野真由子編

万国博覧会と人間の歴史

多様な領域の研究を、政府・業界関係者らによる万博研究25編

本体九、二〇〇円

稲賀繁美編

海賊史観からみた世界史の再構築 交易と情報流通の現在を問い直す

本体一四、〇〇〇円

椎名仙卓著

明治博物館事始め「オンデマンド版」

正史からこぼれがちな興味深い挿話から、明治時代が鮮やかに甦る

本体四、八〇〇円

熊倉功夫 (国立民族学博物館名誉教授) 著

熊倉功夫著作集 第六巻

民芸と近代

7月刊行

A5判・五一六頁／本体七、〇〇〇円

茶の湯を軸として文化史の本質を明らかにしていくシリーズ第6弾。

あいまいになってきた日本のかたち。

美とふるまいの歴史から見直したい。近代の自我と対峙しながら無心の美を求めた民芸運動。和と洋のせめぎあいの中で形成されたマナーと風俗。それは日本人の心の近代史でもある。

〈内容〉

- I 民芸の発見
- II 文化としてのマナー
- III 風俗と酒・美について



並木誠士 (京都工芸繊維大学教授)

青木美保子 (京都女子大学准教授) 編

京都 近代美術工芸の ネットワーク

4月刊行

A5判・三五二頁／本体二、五〇〇円

並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代 編

京都 伝統工芸の近代

京都の美術・工芸がどのような変容をとけて現在にいたるかを解説

本体二、五〇〇円

デザイン史フォーラム 編

国際デザイン史 日本の意匠と東西交流

デザイン史における日本と西洋諸国との交流を探索56篇

本体二、九〇〇円

モノとモノ、コトとコトの関係も結局は人間が中心にある。

ここで考えたいのは、人を中心とした、近代京都の美術工芸にまつわるヒト・モノ・コトのネットワークである。点でも線でもない、ネットワークという「面」からアプローチするところみは、他の地域の近代を考えるときにも重要な手がかりになるだろう。

ビックネームだけでは構築されない美術工芸の現場をあぶり出すことにより、よりヴィヴィッドな美術史が見えてくる。

藤田治彦責任編集

アーツ・アンド・クラフツと日本

デザイン・工芸・美術・社会・産業・環境・生活など立体的な関係を考察

本体二、九〇〇円

藤田治彦責任編集

近代工芸運動とデザイン史

各国における芸術分野での歴史・重要な動向を様々な点から解き明かす

本体二、九〇〇円

熊倉功夫 (国立民族学博物館名誉教授) 著

熊倉功夫著作集第七巻

日本料理文化史

10月刊行予定

A5判・四八〇頁／本体七、〇〇〇円

〈内容〉

- I 日本料理文化史 懐石誕生／懐石以前／料理文化の背景
- II 日本の食文化を考える 日本食文化史の課題／食文化史における思想／食の美学／円居としての食卓／家魚は誕生するか／飢餓の記憶
- III 料理と茶の湯 料理・茶の湯／風流／尾形乾山時代の茶の湯料理／井伊直弼の懐石と真式懐石／日本料理屋史序説
- IV 京都・菓子・お茶 京都と日本の食文化／水と京文化／京の仕出し文化／和菓子の文化／茶の湯と和菓子／シーボルトとお茶

茶の湯を軸として文化史の本質を明らかにしていくシリーズ最終巻。

一般社団法人 和食文化国民会議 監修

和食文化ブックレット

第1期全10巻

最新刊(第8巻) 8月刊行

A5判・九六頁／(各)本体九〇〇円

〈内容〉

- 第1巻 和食とは何か
- 第2巻 年中行事としかた
- 第3巻 おもてなしとマナー
- 第4巻 和食と健康
- 第5巻 和食の歴史
- 第6巻 食材と調理
- 第7巻 うまみの秘密
- 第8巻 ふるさとの食べもの
- 第9巻 和菓子和日本茶(仮)
- 第10巻 和食と日本酒(仮)

※太字は既刊

橋爪伸子 (京都府立大学・同志社大学非常勤講師) 著

地域名菓の誕生

10月刊行予定

A5判・四八〇頁／本体八、〇〇〇円

日本各地にある地域名菓は、われわれにとつてごく身近な存在でありながら、その成立の背景について研究した書籍はこれまでなかった。本書は、近世に完成した日本固有の菓子が、近代以降に社会の変動や異文化との接触をへて変化し、新たな展開を迎えるありさまを検討した。そして現在菓子の主要な位置をしめる「地域名菓」が近代において新たに成立したことを、近世からの連続性に注目しつつ実証した。地域そのものを贈り、味わい、万人で共有することの可能な、唯一の食べものである地域名菓、その栄枯盛衰の物語をたどる。

〈内容〉

- 第一部 総論
- 第二部 近世の名産から近代の名菓へ
- 第三部 非名産の菓子の近代

明治150年特集

先人の足跡を辿る

列陣門唐

佐藤隆一著

幕末期の老中と情報
水野忠精による風聞探索活動を中心に

本体 九、五〇〇円

大阪大学会沢正志斎書簡研究会編
会沢正志斎書簡集

緊迫する幕末の情勢を解明するための一級史料を活字翻刻

本体 一一、五〇〇円

宮間純一著

戊辰内乱期の社会 佐幕と勤王のあいだ
新出史料を活用し、さまざまな思惑が交錯する内乱期の社会像を描出

本体 七、五〇〇円

佐々木克編

明治維新期の政治文化
政治史・文化史・思想史・精神史から明治維新期の諸問題を論じる

本体 五、四〇〇円

佐々木克・藤井譲治・三澤純・谷川穰編

岩倉具視関係資料「全二巻」
新出文書群（未刊行書簡や書類多数）の完全活字化

本体 二四、〇〇〇円

青山忠正著

明治維新史という冒険
平易な文体と豊富な図版・地図で明治維新史の魅力を紹介

本体 二、四〇〇円

小川亜弥子著

幕末外交儀礼の研究
欧米外交官たちの將軍拝謁

本体 五、〇〇〇円

幕末期長州藩洋学史の研究
幕末長州藩の洋学の実態に、軍事科学文化の側面から迫る

本体 六、八〇〇円

佛教大学近代書簡研究会編

元勳・近代諸家書簡集成
前尾記念文庫所蔵の書簡25通を翻刻、読み下し、解説

本体 五、〇〇〇円

鯨島文書研究会編

鯨島尚信在欧外交書簡録
明治初期の現地外交の実態を知る上で貴重な史料集、収録書簡42通

本体 一二、八〇〇円

塵海研究会編

北垣国道日記「塵海」

明治期地方官の実情を記した一級史料、塵海研究会の翻刻成果

本体 九、八〇〇円

小野芳朗編著

水系都市京都 ウィンフラと都市拡張

近代京都の都市史をウィンフラという視点から論じる

本体 五、四〇〇円

梅溪昇著

洪庵・適塾の研究

適塾研究の第一人者が洪庵と適塾をめぐる縦横に論じる一書

本体 一二、〇〇〇円

鳥井裕美子著

前野良沢 生涯一日のごとく

解体新書の訳者として知られる江戸時代の蘭学者・前野良沢の評伝

本体 二、五〇〇円

武智秀夫著

軍医森鷗外のドイツ留学

軍医としてドイツに渡った青年森鷗外の留学の実態を明かす

本体 三、〇〇〇円

岡本貴久子著

記念植樹と日本近代

林学者本多静六の思想と事績

本体 九、〇〇〇円

三宅拓也著

近代日本〈陳列所〉研究

地方行政府により建設された公共の陳列施設の実態を明らかにする

本体 七、八〇〇円

富坂賢・柏木智雄・岡塚章子編

通天楼日記

横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷

本体 一六、四〇〇円

外山幹夫著

医療福祉の祖 長与専斎

日本近代の医療・衛生・福祉の確立者である長与専斎の生涯を描く

本体 二、〇〇〇円

八木聖弥著

近代京都の施薬院

貧困者への医療普及を目指す「施薬院」を中心に京都医界の歴史を考察

本体 三、五〇〇円

小股憲明著

明治期における不敬事件の研究

豊富な実例を整理し明治の不敬事件を網羅、明治国家の特質を考察

本体 一三、〇〇〇円

真辺将之著

西村茂樹研究 明治啓蒙思想と国民道徳論

西村茂樹の思想について、史料に基づき明らかにする

本体 七、八〇〇円

2017年冬〜2018年春 主な刊行予定

描かれた祇園祭 八反裕太郎著

大名庭園の近代 小野芳朗・本康宏史・三宅拓也著

楽市楽座令の研究 長澤伸樹著

茶の湯空間の近代 桐谷邦夫著

岡倉天心 五浦から世界へ

和食手帖 和食文化国民会議監修
茨城大学社会連携センター・五浦美術文化研究所編

オリエントの東 ジラルデッリ青木美由紀編著

住友史料叢書32 住友史料館編

究理堂所蔵 京都小石家来簡集 小石家文書研究会編

園城寺の仏像 第3巻 平安彫刻篇Ⅱ 園城寺の仏像編纂委員会編

能管の演奏技法と伝承 森田都紀著

現代社会のヴァナキュラー文化 ウェルズ恵子編

庭と建築の煎茶文化 尼崎博正ほか編

古代・中世のムラ 大山喬平・三枝暁子編

文人画 往還する美 河野元昭著

儀礼・象徴・意思決定 河内祥輔・小口雅史ほか編

訓読 豊後国史 太田由佳訳／松田清解説

*2017年8月現在の情報につき、書名や編著者名、刊行時期の変更の可能性がございます。予めご了承ください。

ネット書評サポーター募集

ご自身のブログやSNSで本書の書評コメントを書いていただける方に、書籍を献本します。

◎応募要項◎

募集書目…学問をしるもの／天皇のダイニングホール

募集内容…対象書籍は右記2点(表②、30頁掲載)。

募集人数は各3名、締切は10月15日です。

字 数…特に制限しませんが最低でも800字以上はお書きいただくようお願いいたします。

発表媒体…ご自身のブログ、Facebookなど、インターネット上で一般公開されているもの。

アマゾンやレビューなどネット書店のレビューは対象外です。特定の範囲にしか公開されていないもの、一時的にしか公開されないものは除きます。

Readboxの場合は、投稿の公開範囲を「公開」にしている必要があります。

発表期限…書籍送付後3か月以内に公開してください。

申込方法…メール(pub@shibunkaku.co.jp)・FAX・郵送で左記の項目をお知らせ下さい

★書評していただける書籍

★発表する媒体 (媒体を確認できるURLアドレスをあわせてお知らせ下さい)

★申込に当たってのアピールポイント

★お名前・ご所属・書籍お送り先住所・電話番号・メールアドレス

審査結果の通知…各書籍募集締切後、結果をお知らせします。

審査の内容についての問い合わせには応じられませんのでご了承ください。

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



本書は初代歌川豊国による彩色刷の女性風俗絵本であり、美人画に非凡な才を見せた初代豊国の代表作として、また浮世絵絵本の傑作として内外から高い評価を得ている。作者の初代豊国は多くの弟子を輩出した歌舞伎界の最大画派「歌川派」の領袖である。

本書には初印本と後印本の存在が知られるが、本書は享和二年刊の奥書を持ち画中の人物の身分・身柄を記した名標を存する初印本である。衣服の繊細な紋様まで実に明瞭に刷り出されており、当時の木版多色刷の技術の高さが見て取れる。

◆絵本時世粧◆歌川豊国

構成は乾巻の冒頭に式亭三馬による序文二つを置き、各巻見開きで十二図、計二十四図の挿絵を収める。各巻の絵の後に豊国作・三馬閨の文章が続き、乾巻は女性一般について、坤巻は遊女の世態・習俗を解説する。

挿絵には武家・町人・花街等における様々な階級・職業の女性が登場する。建物や部屋の設定も含め彼女たちの日常の様子が巧に描写され、当時の衣服・習俗などの貴重な風俗史料を提供している。ページを繰るごとに御殿の深奥の女性たちから苦界の刹那に花開いた遊女たちまで、様々な女性たちが躍動感を伴って眼前に蘇るかのようである。

(思文閣出版古書部・嶋根勝彦)



美術品の架け橋、 思文閣大入札会

お客様のもとで受け継がれた価値ある美術品を、
求めている方へとお引き合わせします。

ご出品をご希望の方は、まず査定のお申し込みを

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
satei@shibunkaku.co.jp



我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



武田信玄判物

一幅

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの
商品を取り扱っております（年4回程度
発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部
までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp



植松永次展

平成29年11月3日（金・祝）～19日（日）
 10:00～18:00 会期中無休
 思文閣京都本社

Eiji Uematsu

November 3 Fri -19 Sun, 2017
 10am-6pm open everyday
 Shibunkaku Kyoto

SHIBUNKAKU

思文閣

〒605-0089

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
 tel: 075-531-0001 gallery@shibunkaku.co.jp